

栗原彬 政治社会学 にとっての水俣経験

討論者 和田 悠（慶應義塾大学社会学研究科社会学専攻博士課程 2 年）

yu-wada@cb3.so-net.ne.jp

はじめに——報告のスタンス

* 〔報告者の研究領域〕戦後日本社会の「社会史的な文化史・思想史」（卒業論文「藤田省三の哲学研究序説：高度成長を拒否した思想家」、修士（社会学）論文「転向経験の社会史：松田道雄の場合」、臨床教育・社会学（「学級づくりの社会学的考察：ある小学校教師の総合学習の実践に即して」）

* 報告の目的と方法

I 栗原流（政治社会学）（「栗原ワールド」）と『環境を平和学する！』およびビーレフェルト学派（M・ミース）のサブシステム・パースペクティブとの接点、共通性と差異を（私なりに）明らかにし、質疑のとっかかりをつくる。

II そのために、今後も深まりを見せるであろう栗原流（政治社会学）の「現在」を「栗原彬の到達点」として設定し、栗原（政治社会学）の航跡を追う。栗原（政治社会学）に寄り添いながら、栗原（政治社会学）の側から、サブシステム・パースペクティブの射程を検討したい。

〔検討する栗原作品〕『管理社会と民衆理性』（新曜社、1982 年）、『歴史とアイデンティティ』（新曜社、1982 年）、『政治のフォークロア』（新曜社、1988 年）、『内破する知』（東京大学出版会、2000 年）、「市民政治のアジェンダ」（『思想』908 号、2000 年）、「生命政治と平和」（『平和研究』第 26 号、2001 年）、「水俣病という思想——存在の現れの政治——」（『立教法学』第 61 号、2002 年）／緒方正人『チツソは私であった』（葦書房、2001 年）

栗原 政治社会学 の領域と問題の所在（初心）

1 栗原 政治社会学 の領域と問題意識

* 『歴史とアイデンティティ』（新曜社、1982 年）「あとがき」を参照

①近代日本の心理＝歴史研究（修士論文「逸脱型日本人の対外態度：民衆宗教大本の場合」）

②青年意識論（『やさしさのゆくえ＝現代青年論』）

③日本型管理社会の社会意識（市場にも政治にも支配されない場としてのアジュールへの着目）

* 栗原の関心は政治システムに抗する民衆（世界）

「大本は、たんに『走狗』として、また民衆宗教弾圧の「先がけ」として、ましてや『誤解』によって、第二次弾圧を受けたのではなかった。大本は近代天皇制の奥処に触れ、それを内側から突破する論理を胚珠として育てていたからこそ、あの時点で弾圧されたのである」（『歴史とアイデンティティ』）

「近衛は、幼児期の〈不信〉を共有し、友人をもたないもう一人の孤独者である天皇と自分との間に、一種のコミットメントと共同性を見出していたかも知れない」（「近衛文麿のパーソナリティと新体制」、『年報 政治学 1972』岩波書店、1973 年）

栗原の関心は歴史よりも、むしろアイデンティティにある。1930 年代という時代ではなく、社会的結合のあり方に関心を寄せた点で栗原は社会学者と言い得る。

2 栗原彬の研究履歴

*E・H・エリクソン『青年ルター』『幼児期と社会』（アイデンティティ、歴史心理学）

*「逸脱型日本人の対外態度—民衆宗教大本の場合」（修士学位論文、1964年）

『昭和史』論争以降、講座派マルクス主義歴史学（下部構造決定論的歴史叙述）への方法論上の対抗から出てきた民衆思想史（社会史）の影響。自律的な民衆 世界 の設定（「純粋な集団性」）文化と経済の関連性、文化の商品化に関心を寄せるテッサ・モーリス=鈴木との力点の違い（《座談会》グローバル化と多層な「公共圏」）

*1964-66年 コロンビア大学院（ニューヨーク）社会学学部修士課程留学（「ロバート・K・マートンおよびポール・ラザースフェルトを中心に、ホアン・J・リンツやイマニュエル・ウォーラスティンらの異色の社会学者を擁していた」「アメリカのベトナム侵略に反対する学生反乱に遭遇」）▶栗原青年論・管理社会論の原点

*1969年 石牟礼道子『苦海浄土』を読む、「対話と共感の社会学」「生活者の社会学」の提唱（『思想の科学』路線）

*1970年代後半 カリフォルニアとニューヨーク、スペイン、フランス、ギリシャ、エジプト、インド、メキシコ、ネパールへの長短期の集中的な旅、1983年～山本哲士らと『叢書 社会と社会学』を編集。

*1970年代後半 水俣にフィールドに入る

*1980年代半ばごろ「水俣大学を創る会」（現、水俣フォーラム）にかかわる

*1996年 水俣・東京展

栗原彬にとって、1990年代の時代経験は、水俣を自らの思想にとっての拠点として、知識人としての転生を可能にしたのではないか。（『越境する知』、「最終講義」へ）「見えども見えず、聞こえども聞こえず」

栗原彬にとっての1990年代の水俣経験

1 現在の栗原彬の到達点（2000年代の論文を中心に）

*緒方正人に「寄り添い」ながら水俣を根拠地として、水俣に即して思想化し得た。

水俣という地域や水俣病のメカニズムよりはむしろ、栗原にとっての関心はアイデンティティにあり、そこに栗原の初心と研究者としての個性がある（と、私には思われる）

*最大公約数的な理解から「正確な理解」へ（内田義彦『読書と社会科学』を参照）

「楽譜に書いてあることを正確に読み、その通りに正確にひく、これがおおよそ演奏の基本で演奏家はその基本を守らなければならない。ところが、技術の不足や薬指の独立性がどうといった生理的な欠陥あるいはくせ、さらには気質——たとえば「待つ」という時間の「空白」に耐えきれないでついテンポが早まってくるといったことがあればそういう気質ですね——が、正確な演奏をさまたげる。そこで、それをどう克服し正してバッハその人の書いた楽譜に迫ってゆくかに演奏の妙味がある。と、〔森有正は〕こういって、そこに次のことをつけ加えています。シュバイツァにしる、デュプレにしる、それぞれ精密に楽譜を調べ、徹底して楽譜に忠実であった。そしてそれゆえに、彼らのバッハ演奏は、それぞれ個性的である。（中略）さらにこの演奏論を、理解という当面私が問題にしていることに即して考えると、こういうことになると思うんです。誰がひいても同じ演奏になるような、そういう最大公約数的な、その浅い理解では、とても正確な理解などとはいえない」

*水俣を内側からとらえようとする視点の確立

* 「存在の現れ」の政治、新しい倫理学（他者性の設定）の地平。「存在の現れの政治とは、〔非決定の他者と遭遇することで〕自分が変ることを意味します」「現れるのは、固有名をもつ一人ひとりの人間の存在ということになります」（「水俣病の思想」）

* 「また、ちょうどタマネギの皮を剥くように全てが権力で構成されているという見方もそうです。アイヌも水俣病患者もすべて権力によって構成されたものだってね。要するに『はい、それでおしまい』なわけですよ。……ところが、その先に行こう〔内破すること〕という話になると今度は対象に対する「立ち方」が変わってくるんです」（『シリーズ越境する知』の編者・栗原彬氏インタビュー）

1990年代の水俣経験（水俣の思想化）は、栗原自身が内面化していた「知の構造」を変容させ、「存在の現れ」の政治という新しい地平に栗原を立たせた。1990年代の従軍慰安婦問題と共感をめぐるポリティクス、立岩真也、斎藤純一らの「生の社会学」「生の政治思想」などの新しい議論を意識しつつ、水俣問題のとらえ返しがあった。「やさしさ」の構造化。

2 「水俣の思想化」以前の栗原彬の初心とその展開

「高度産業社会におけるパトスの構造」（『朝日ジャーナル』1972年10月27日号）

* 「存在の現れ」の政治ではなく、疎外の「相互性」の回復による克服

* 二項対立的な用語法による整理

* 民衆世界・民衆文化の「構造」や「過程」を叙述するところまではたどり着かず、「論理」の発見（析出）の段階で考察を終えている。

「他人と縁を結ぶということは、分節していえば、共生、係累、自他未分の集合体意識等から、他者の示さない距離の確認へ、ついで、他者のなかの人間の発見と自己のなかの人間の発見へ、つまり自他転生ないし再共同化へと歩み出る過程である。距離のかかわりと相互的な運動から、たとえば家族のメンバーは、たがいのなかに自律的な他人を発見し、同時に、もう一つ深いつながりを再発見する」

「相対の領域への越境 『水俣病がある』ということ」（『思想の科学』、1986年6月号）

* 一般的な「相互性」を、水俣に即した「相対」の論理として再定義

* （やや図式的に整理すれば）相互性から関係性への転換

「チッソのとの直接交渉ほど劇的に、自己中心的な『主体』と、相互性を求める『他者』との関係を暴露したできごとはなかった。患者たちが求めたことは、永年の苦しみを聞いてもらうこと、自分たちの気持をわかってもらうことだった。（中略）患者たちが、世外の『他者』となっていくとき、それと緊張した関係の糸を張りつめながら、チッソの幹部たちは、『主体』、もっとありていといえば、産業社会の『主体』へとせり上がっていく」

本音と建て前・「いじめ」の政治学・自我の二重像といった二項対立的な整理から、「1現在の栗原彬の到達点」で確認したように、1990年代に入ると、「はい、それでおしまい」ではなく、より重層的なつながりのなかに生きるという営みを把握するようになる。

3 栗原にとっての水俣問題認識の深まりの契機は何か

* 「グレイゾーン」の発見（「水俣病の思想」）、村山富市政権下で進展した「和解の政治」（中曽根流「戦後政治の総決算」）を支える「市民社会」の発見。

*水俣展の前夜祭に出魂儀をめぐる問題

*戦時と戦後の水俣の風景論的連続性（「内破する知」）

*韓国内部の植民地協力者を問題とすることが可能となった 1990 年代の植民地研究の視座

栗原彬 政治社会学 の批判的継承のために

1 栗原流「内破」の戦略の射程の問題

i 栗原彬〈政治社会学〉、『環境を平和学する』、「サブシステム・パースペクティブ」の位置関係

*「信じる」(祈り) ことの意味の重要性、視座の獲得による世界認識の更新（緒方 2001:217-8 参照）

*「サブシステム」領域 = (倫理性を内包した) 社会 の基礎をなす物質的、精神的基盤

・横山正樹 サブシステムとは「生命維持のための物質的諸条件だけではなく、それを永続させる環境（自然生態系）および社会的諸条件がその構成要素となる。それは個体のたんなる生存最低条件ではなく、個体とその集団が生命を維持して、本来性を発現し、類として永続しうるための諸条件のすべてを意味する」

・栗原彬 「ピープルの政治は、生命圏から公共性を直立させてきた。それは生命の尊厳を救い出す存在、生存の次元の公共性である。先住民は受苦の底から生命系の根源的豊かさを「環境的正義」の概念に結晶化した」（「市民政治のアジェンダ」）「サブシステムとは、私たちの知っている経済過程とは異なります。そのまま訳せば「実在」になりますが、私は存在の現れ、生命の別の形式のアピランス（現れ）と言っていると思います」「非領有、被支配の場」「生活世界」（「水俣病の思想」）

・M・ミース 「史的唯物論のフェミニズム的再構築、もしくは「女性抑圧の物質的基盤」を明らかにするサブシステムを、生命を支える基盤として、肯定的に捉えるのである。つまり、サブシステム・パースペクティブを端的に表わすと、「攻撃的、搾取的で、エコロジー的に破壊的なテクノロジーだけでなく、商品生産型で、成長志向の資本主義／社会主義的産業構造に対する実践的な批判」であり、「エコロジー的にやさしく、フェミニストで、非植民地主義的・非搾取的な社会」（Mies, *Ecofeminism*: 318）を志向する、ホリスティックな「ものの見方」なのである」（上田佳奈、修士論文）

栗原・横山（平和学）「サブシステム」= 本来性、追求すべき価値（規範的）/ M・ミース：現代社会の分析および叙述上の概念、「労働」領域と関連してサブシステムをとらえている。

※ 栗原彬「政治システムは生活世界を領有し尽くすことはできない。非領有、非支配の場が残されていさえすれば、生活世界は呼吸し脈動する」（「市民政治のアジェンダ」）「生の臨界状況に立たされた『難民』・マイノリティが生き延びようとするれば、この人々は生命をエコノミーに回収しきれない潜勢力の強度として捉え、生命圏を非決定・非領有の生命の現れの場にするもう一つの政治に赴かないわけにいかない」（「生命政治と平和」）

「経済主義的なマルクス理解、貧窮化 革命」とのアナロジー？ エロスを喪失し、ポスト・高度成長時代の若者にとってはいかにして生命圏を感得するのが問題。「コミユナルな知」の復権：

「知識を共有することがまるで知識を減価させることであるかのように感じてしまう私たちの感覚」(中西新太郎)。「知識」が選抜の道具にされ、選抜が「勤労者」としての処遇と関係してしまう。「普通のためのモーレツ」(熊沢誠)。

2 緒方正人さんの位置づけをめぐって(力点の違い)

i 〈代行政治→和解の政治〉と〈存在の現れの政治〉を対立的に語ることへの違和感。専門家の管理支配を否定するという点では栗原の議論の運びに共感するものの、問題は代行政治を存在の現れの立場からとらえ返すことではないか。

ii 「政治的な「読み」「解釈」であることを断りつつ」「中間層」の没落と「ぷちナショナリズム症候群」(香山リカ) = 「若者が《社会的弱者》に転落する」(宮本みち子) 非人称の連帯」としてのセーフティー・ネット、ナショナル・アイデンティティの再構築という戦略。「国民」であることの解放性(丸山眞男段階とは異なる)。「自己決定の政治と存在の現れの政治と、両方の政治的なパフォーマンスを手離すことなくやっていくしかないのではないか」「自己決定の政治」=水俣病者がチッソと直接対決する場面での政治を想定、「行政システムの土俵に乗ること」と「行政システムの転換を目的に責任を追及する」ことの次元は違う。

iii 緒方正人「チッソは私であった」という「加害者は同時に被害者であり、被害者は同時に加害者でもあるような、人間の業に届くグレイゾーン」は、たとえばベ平連の小田実とどこが違うのかという視点から語りなおすことで、水俣の思想化の新しさが見えてくるのではないか。